筋力の指標としては，徒手筋力テスト（MMT），積算筋電位(iEMG)，自動関節可動域(Active ROM) を用いた．

バイオフィードバック訓練開始前と訓練4週間後の筋力の変化は，MMT で次のようである．左大腿四頭筋が「0」から「3⁻」に右前脛骨筋が「1」から「1⁺」に，左前脛骨筋が「0」から「1」にそれぞれアップした．自然回復を無視することはできないが，筋収縮が極めて小さく筋収縮を知覚できない筋の収縮の知覚を可能とし，また，各時期にその段階での最大収縮に近い収縮を可能としたことにより，筋力増強に効果があつたと考えられる．

5．「猫泣き症候群」の1例

（小児科）

浦本　恭子・富本　昌子・山口規容子・福山　幸夫

（循環器小児科）安藤　正彦

1963年 Lejeune らは，常染色体B群の1本の短腕に部分欠失をもつために，甲高い子猫のような泣き声と，特有の顔貌，精神遅滞などを有する症例を「猫泣き症候群」と発表し，翌年 DNA 複製パターンより，異常染色体は5番染色体であることを確認した．その後，特有な泣き声を有する精神遅滞例として診断が容易なため症例報告は増加の一途をたどり，本邦でも50例以上にのぼつている．我々は，最近，新生児期に診断しえた1例を経験したので報告する．

症例は，昭和56年2月7日本院産科にて出生した男児．母は36歳の高年初産であり，大動脈狭窄にて2度弁置換術を施行している．尿中 Estrogen 3 の低下あり胎盤機能不全が疑われ，non-stress test にて胎児性徐脈あり胎児仮死があつた．出生1分後 Apgar score は4点と新生児仮死Ⅱ度であつた．自発呼吸弱く，pH 6.979とアシドーシスを呈し，アルカリ療法も行つた．

胎児仮死，新生児仮死によると思われる，日齢1日目よりの無呼吸発作，日齢9日目より subtle type seizure が出現したが，Phenobarbital により消失した．

一方，内眼角贅皮，眼球隔離，小下顎を有する特異な顔貌，指の重畳，腹直筋離開，小陰茎を有し，出生児低体重であつたことより染色体異常を疑い，染色体分析を行つたところ，5番染色体の短腕部分欠失を認め，「猫泣き症候群」と診断された．

けいれんの消失と同時に甲高い小猫様の泣き声も出現した．

患児は現在，生後8カ月であるが，中等度の精神運動発達障害，発育障害を認めている．

考按：新生児期に特異な顔貌，他の各種身体小奇形を有したため，染色体分析を行つたところ，5番染色体短腕の部分欠失を認め，「猫泣き症候群」と診断し得た1例を報告し併せて，臨床的検討を中心とした文献的考察を加えた．

6．Glioma（grade III, IV）に対する放射線治療経験

（放射線科）

○後藤真喜子・大川　智彦・渡辺　紀子・喜多みどり・関口　建次・池田　道雄・田崎　瑛生

女子医大放射線科では，1967年から1980年までの14年間に318例の原発性脳腫瘍を扱つた．このうち glioma は185例で，high grade glioma は134例であつた．そのうちわけは，pinealoma 35例，medulloblaotoma 25例，その他74例である．このうち根治的線量が照射された pinealoma 20例，medulloblaotoma 19例，その他58例について，その生存率に関与する因子について分析した．Pinealoma は術後8カ月で死亡した1例と3年8カ月後に再発死亡した2例以外はすべて生存中である．Medulloblaotoma の5年生存率は約30％であつた．その他の群（glioblaotoma multiforme, malignant astrocytoma, malignant ependymoma）では全体の5年生存率は約11％であつた．年齢39歳以下の群が40歳以上より成績が良く，grade ⅢがⅣよりやや良い傾向があつた．照射法では，線量5,500rad 以下の群，局所照射のみで全脳照射をしない群で生存率が良かつた．

7．大動脈弁上狭窄症術後感染を合併し，再手術を要した1例

（心研外科）

本多　正知・高梨　吉則・今井　康晴

今回われわれは，大動脈弁上狭窄症に対しパッチ拡大術を施行し，術後創部感染より，縦隔洞炎，菌血症が，認められたため，やむなくパッチ交換術を行なつた．心臓外科領域では，術後急性期の縦隔洞炎は重要な問題であり，Serry らは4,124例中，74例に創部感染を伴ない，その中で菌血症，縦隔洞炎を併発した19例について，1例も救命し得なかつたと述べている．今回我々は，創部感染より縦隔洞炎，菌血症を合併した1例を，再手術により救命できたので報告した．

8．肺癌に対する温熱療法の1例

（胸部外科）